

1月4日（日）主日礼拝レジュメ

「思い上がらず、慎み深く」 ローマ人への手紙12章3節

「思うべき限度を超えて思い上がってはいけません」（3節）これは、プライドを持つことを戒め、そのことについて警告を与えている。そして、パウロは自身が自らを誇ろうとせず、思いあがることのない人物であった。それは、彼が使徒としての働きは、神の召しと神からの賜物によることをよく知っていた。思い上がりは、私たちが人からほめられた時に出てくる。逆に、自分より称賛される人、自分よりすぐれた働きをする人、自分よりも能力がある人が出てくれば、妬みやおもしろくない思いなどがわいてくる。ですから慎み深く考えることで、私たちは思いあがりを中心から除くべき。

3節で問題になるのが、「信仰の量り」の解釈です。ここで言われている量りとは、限度とか量を表す言葉であると考えられる。つまり、神様は各自にみこころにより信仰において分け与えてくださっている量があり、その量が異なっている。

- ① コリント人への手紙第一12章9,10節「ある人には同じ御霊によって信仰、ある人には同一の御霊によって癒やしの賜物、ある人には奇跡を行う力、ある人には預言、ある人には霊を見分ける力、ある人には種々の異言、ある人には異言を解き明かす力が与えられています。」

神様はさまざまな御霊の賜物をみこころにより与えられている。そして教会の兄弟姉妹にあっては、全く同じということはありません。むしろ、先ほどのコリント人への手紙第一12章9,10節にもあるように、そこで語られているのは多様さである。そのように多様な賜物をもって多様な働きを行うということが主のみこころだということ。そして、私たちが与えられている信仰も、神の恵みであり、神の賜物であって、それについて何かを誇ると

いうことはできない。そして、もし働きによって、また信仰の歩みの中で何かを成し遂げることができたとするなら、それは主の恵みによってなされたことであり、主のあわれみによってなされたことであって、自分が何かをすることで成し遂げたということには決してならない。そのようにして主に全ての栄光を帰していくなら、そのようにして慎み深く考えていくなら、決してプライドが私たちの内に出て来るといえることはないし、そもそも信仰は完全に神からの恵みの賜物という考え方を持ち続けるなら、プライドによって悩まされることもない。

パウロは「自分に与えられた恵み」と言っている。すべてが、主によって自分に与えられた恵みだと彼は考えていた。恵みとは、ふさわしくない者に対して一方的に与えられるもの。また、逆に自己卑下に陥ることもない。教会にはあなたを必要とする場所が多くあり、主の目に小さすぎる働きはないし、自分がいなくても教会は変わらず回っていくことは絶対にない。「一つのからだには多くの器官があり」(4節)とあるように、一人一人にはなすべき多様な働きがあり、多様な賜物がある。神がみこころによって各自に分け与えてくださる信仰の量りは異なりますが、それに応じて、それにふさわしく、すべては主の恵みであり、自分自身は主のからだである教会の一部の器官であるものとして慎み深く考えましょう。